

## 研究ノート：

# ケータイ利用の教育とケータイ文化周辺

北 岡 一 道

(2005年1月20日受理)

## 1. はじめに

語学の教員として、ケータイが授業に有効に利用されることを教えていただく機会があった。「New Education Expo 2003 in 大阪」において、名倉健氏(名倉(03))は、SELHiの実践例として、和歌山県立星林高等学校における英語・語学教育の取り組みを報告されている。そのなかで、興味深いと思われたのは、LL教室における、携帯電話(ケータイ)の関わり方であった。ケータイ配信される、<もばりシッシュ>という英語テキストが利用されるというものであった。(システムのごく一部であるが。)

「Expo」の企業展示と、語学関係の発表は、比較的、CALL(専用教室、ないし、関係機器)の利用に関係するものが、圧倒的で、特殊開発したパソコン関係機器の話ばかりだった。「電車のなかで、高校生が操作している」あのケータイが、教育機器に?という印象だった。(03年当時、筆者のみかける地方の電車のなかでは、ケータイの操作はおもに、高校生(とたぶん大学生)にかざられた。04年には、初老の男性が2人で、2人ともケータイをにぎったまま、会話するというのを見かけるようにさえ、なった。)

04年10月の新潟県の中越地震では、(激震地では)固定電話の回線が寸断され機能しなかった。その間、ケータイが比較的働き、テレビにでる現地のひとはケータイで答えていた。固定電話を含む主要なライフラインが、破壊されたときも、機能するケータイの(少なくともある一面での)強さを感じた向きも多いことだろう。ケータイが固定電話の副次的なものでない、という印象をあたえ

た機会となった。(実際は、主だったケータイでも一部停止し、復旧には各社(AU、ドコモ、ボーダフォン)で、若干のずれがあった。と報道された。)ケータイが強力な可能性をもったものだと感じられた。

## 2. 和歌山県立星林高等学校とくもばりシッシュ>

名倉健(03)氏は、和歌山県立星林高等学校における、「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール(SELHi)」研究指定の実践についてのべておられる。文科省の、いわゆる「英語が使える日本人」をめざす試みの一部である。以下、名倉氏の資料と、いただいた、お話ししたがってケータイ関連までたどってみる。

星林高等学校では、全日制普通科のみのところに昭和41年英語科が新設され、52年に廃止。その後間隔をおいて10年ほどの国際交流科ができている。(一学年普通科5~6クラスにたいし、2クラス。)

「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール(SELHi)」は文科省の「「英語が使える日本人」育成のための戦略構想、英語力・国語力増進プラン」の線上にある。同省のHPでは、次のようにいっておられる。(引用)

趣旨 英語教育を重点的に行う学校をスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールとして指定し、英語教育を重視したカリキュラムの開発、一部の教科を英語によって行う教育、大学や海外姉妹校との効果的な連携方策などについて実践的研究を行う。

そして具体的な政策課題は(1)学習者のモチベーションの高揚、と(2)教育内容の改善の2つである。後者の下位項目のなかに、「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi)」(3年間で100校指定)は入ってくる。

星林高等学校のSELHiとしての研究課題は、「連携型中高一貫教育における英語教育を重視した、教育課程の編成と英語運用能力を高める教育方法の研究」としておられる。平成14年度の研究計画は7項目で、

- (1) 本校のこれまでの外国語・国際理解教育の成果と課題の明確化
- (2) 教育機器<LL教室>の充実及び新教材の導入
- (3) 英検、TOEIC、TOEFLなどを利用した英語能力の到達度評価
- (4) 海外研修に伴う英語コミュニケーション能力の育成
- (5) 外国人講師とその活用についての研究
- (6) スーパー・イングリッシュ・キャンプの実施など関連事業
- (7) 中高一貫教育のもとでの教育課程編成及び授業実践展開方法の研究

である。

この研究計画の第2項目が「教育機器<LL教室>の充実及び新教材の導入」であった。そのLL教室でケータイ配信の<もばりっシュ>が活用される。(もばりっシュの高校英語教育での、先行例はほかに、大阪の住吉高校などがある。)もばりっシュに関する解説を名倉(03)氏から、引用させていただく。

「もばりっシュ」はドコモ・モバイル株式会社毎日インターネットを経由して英語のニュースやトピックを配信するサービスである。このサービスでは100語～200語にまとめられたニュースをそれぞれ2つのレベルで聞くことができる。レベル1ではTOEIC400～450点レベル、レベル2は500点レベルとされ、ダウンロードすることによって何度も繰り返しネイティブ・スピーカ

ーによる朗読を聞くことができる。また、テキスト(英語・日本語)を見ながら語句解説を参照することもでき、理解しやすくなっている。

(もばりっシュは残念ながら、05年1月末で新規・継続の加入を停止する予定。)

星林高等学校では平成14年にLL教室が改修されCALLタイプとなった。国際交流科の生徒の複数の授業(「LL演習」、「外国事情」、「国際交流活動」など)で使用されている。

名倉(03)氏は「外国事情」の授業における指導例を紹介しておられる。(引用)

指導例「外国事情」(50分2単位)

- (1) 本時の目標を提示する。
- (2) 教材資料を配布する。(LLシステム(「PC@LL」(株)内田洋行)により各生徒のPCに配布)資料1
  - (a) Question-Answers
  - (b) Summerization of the paragraphs
  - (c) Summarization
- (3) 「もばりっシュ」からニュースをダウンロードする。
- (4) 朗読を聞かせる。(1回目:内容を聞き取る、2回目:回答する、3回目:回答を確認する)
- (5) 「もばりっシュ」の英文テキストを見ながら自己採点し、重要語句、表現を整理する。
- (6) 3つのニュースの中から、最も興味を引くものを1つ選択し、インターネットで調べ、レポートを作成する。
- (7) レポートを回収する。(LLシステムにより各生徒のPCから回収)

ここでは、LL教室内で利用されている。もばりっシュのニュース自体はケータイで配信されているので、生徒はそれを自分のケータイでなんども、聞き返し、読み返して復習することができる。そしてLL教室とちがいで、器具や場所にしばられることが(基本的に)ない。(名倉(03)氏の発表の時点で、星林高等学校の(国際の?)「生徒はほとんどケータイをもっている」とのことであ

った。)この年間研究計画は14年度のもので15年度以降は、移行・改定され、「もばリッシュ」の利用は研究項目に入っていない。

### 3. 仏教大学のラーニンサポート

仏教大学は、通学学生、通信教育の学生、四条センターで受講する社会人の学生の3つタイプの学生がいる。学習目的や、教育手段のことなる学生を対象とするため、もともと、教育方法への関心をもたざるをえない状況にあった。また、原(2004)氏が強調されるように、中規模の私立大学という条件があった。以下、お話と資料にしたがう。

2000年、同大学の教授法開発室(室員9名)が発足した。教授法開発室の教育工学の専門家が先端的ツールの活用を勧め、大学の目標のひとつとなっている。教授法開発室の役目として、(あ)教職員への情報提供、(い)教育活動の支援、(う)各部署のあいだの連絡調整、を当初からかかっている。教授法開発室ではさらに「学生の自立的学習」と、「授業方法の開発と改善」という成果を目標としている。そして、後者について、具体的な方策を出していくことにした。

教授法開発室の部門担当は(1)学習システム開発部門、(2)情報調査部門、(3)評価システム開発部門、の3つとした。((1)学習システム開発部門が、「学習する時間と空間を固定しない「ユビキタス・ネットワーク」という概念をもとに、IT技術を利用して、学生が自律的に学ぶための「ラーニング・サポート・システム」を構築することを目標にした。)同大学に適切なFDのありかたとして、チップス型(教育情報の発信を主とする)と、ワークショップ型(教職員の討論会やワークショップなどで相互啓発を行う)の中間が模索された。原氏によるとFD活動への取組として「比較的、後発の大学」ではあった。

教授法開発室は発足後、学生や教師の実態、意見をjするため5つの段階で調査をおこなっていた。(引用、字句一部変更)

- (2) 教員対象第1回「授業改善に関するアンケート」(2000年7月)
- (3) 前提学力調査予備調査(2000年12月)
- (4) 前提学力調査(2001年4月)
- (5) 全学的な授業評価(2001年11月)

教授法開発室は、00年7月、教員の実態調査を実施した。アンケートの結果では、先生がたが授業改善(充実)をのぞんでおられるが、なかなかできない、ことがわかった。とくに、問題は3つの点であった。(引用)

- (1) 学生の学力不足と受講態度に不満を感じる。
- (2) 学生の授業準備に費やす時間が十分でないと感じる。
- (3) 授業では学生への対応が十分とはいえないので、満足 of いく授業ができていないと感じる。このことは、専門科目でさらに深刻であった。

教授法開発室は、ついで学生の基礎学力を測る調査をおこなった(00年予備調査、01年調査)。入学直後の学生の学力を、これからの授業の「前提学力」とみて、民間の就職総合テストを使って、学力を調査した。就職総合テストは、「基礎常識」、「社会常識」の2分野、9つの下位分野からなっている。総合テストで、全国の大学生のうち8万人との比較ができる。また、入学後に、おこなった試験とくらべ、学力の伸びをjることができ

る。さらにその後、01年、学生による授業評価がおこなわれた。(原氏は「授業評価では(だけでは?)FDは深化しない」と主張される。)アンケート項目は他大学とあまり変わらないという。教授法開発室は、このアンケートを、「学生と教員」のコミュニケーション情報としてとらえ、検討し、授業法の改善の具体的方策をだしていった。

「授業に関する「興味」をひきだし、学生のモチベーションをたかめ、「授業内容の理解」をたすける道具として、ケータイを使った授業方法が試みられた。」ジャーナリズムでは、若者のコミュニケーション・ツールと大学のアカデミックな

- (1) 授業科目についての学生アンケート(2000年7月)

授業の対立にたいする興味という見方が強調されて紹介された。

原氏によると、ケータイ導入には2つの目的がある。第1に、授業において、教員と学生がコミュニケーションする手段として適当なものを選ぶことである。教育工学的には、その時々に応じて、適当なツールが用いられるべきだと考えられる。教授法開発室の上記の調査分析の結果が、ケータイを教育支援の手段として選ばせたのである。

システムの構築にあたっては、教授法開発室の西之園晴夫教授の「ユビキタス・ネットワーク」という概念に示唆された。ユビキタス・ネットワークあるいはユビキタス・コンピューティングとは、「生活のあらゆる場面で」で情報端末などが利用されるような情報環境のありかたを指している。(同大学は通信制があり、従来の印刷教材の配本(郵便)、フィードバックであるレポートの郵送、科目の試験という、コミュニケーションの特定されたありかたの検討課題があった。)

たとえば、次のような状況ではその有効性が理解しやすい。授業のなかで(引用)

小学校のころいじめにあったことがあるか、という(指導者の)質問に挙手で答えさせようとしても、正直に手を挙げることは普通ためらいがある。これを携帯電話で答えさせ、その結果を、即時に大型画面で提示しながら授業をすすめれば、学生の授業に対する主体的な参加意識はいやがうえにも高まる。

授業のなかで、プライバシー、個人情報の保護、相互カウンセリングの状況が比較的、穏当に処理されることになる。

第2の目的は、学生の学習の自律性をめざしている。「勉強は教室や図書館でするもの、独りでするもの、(あるいは先生に教えてもらうもの)」という考え方から、「いつでも、どこでも勉強できる、自分たちが学ぶ場所をつくっていく」という見方に、学生が変わっていつてもらいたいということだ。従来、学生のモチベーションは、それ自体、授業でほりおこされるようには、なっておらず、有効な手段もなかった。学生同士の「口コ

ミ」のようなかたちで、モチベーションがささえられていたにすぎない。

ラーニング・サポートは、もともと、学生がケータイから教員のWebサイトにアクセスして、出席管理をするというシステムをすすめたものである。例えば、学生の理解度をしるため、授業に関する「簡単な」問題を作っておく。授業中に学生がケータイから回答を送る。その回答は指導者のWebサイトに「瞬時に集積され、どの選択肢を、どれくらいの学生が選択したかが、分かる。」それを、その場のプロジェクターでグラフにして見ることができる。

このほか、学生から教員への質問をメールで処理する、

<掲示板>で学生同士が教えあう、質問として授業評価アンケートをいければ「瞬時にその結果を教員にフィードバック」できる、(この機能だけを特化して開発した他大学の例もある)

学生同志のコラボレーションを支援する、などの利用が考えられる、という。2002年から教授法開発室のメンバー9人が授業において試験的に使用し、じょじょに広がっている。

#### 4. ケータイ文化とその周辺

ケータイは、その名称のため((固定)電話/携帯電話)、固定電話との対比で語られ、固定電話が、回線のとれたもののようにあつかわれることが多い。しかし、技術的には、ページャー(ポケベル)の段階があり、ページャー(メール相当機能あり)に電話機能が付加されたとみるのが、むしろ正確だという。近年とくに(単機能化もふくめ)多機能化し、どの機能を中心とみるべきか、があまり意味のないケータイ諸機種文化が形成されつつある。

藤本隆弘(2003、12、中央公論、p56以下)氏は、工業製品を生産プロセスから分類して(1)「擦り合わせ型アーキテクチャ」の製品か、(2)モジュラー型製品かといった見方を出しておられる。氏は自動車・乗用車を擦り合わせ型、パソコンを後者の典型(とくにデル社のような生産システム。)としておられる。つまり、乗用車は、(1)

ユーザーからさまざまな機能・価値を製品に要求され、(2)部品間の相互依存性が強く、(3)部品はその製品のために最適化された特殊設計部品である、といった消費財である。これに対し、パソコンや自転車などは、汎用部品を集めて作れる特徴がある。ケータイは、乗用車ほど複雑ではないがどちらかという、特徴の(1)や(3)はあるていど、当てはまる。(市場状態は、複雑である。)

ケータイは、技術的には、日本が単独トップだといわれるが、普及率では、先進諸国ではやや高めというていどであるとされる。(データによって差がある。プリペイドの利用と、機器数と、契約数などの、読み方のちがいらしい。たとえば同じ人が何度も、買い替えたなら、全体の〈契約数〉はふえる。〈普及率〉の特に高い国で、よく使用されるプリペイドの場合、〈購入〉されても実際つかわれないうで、放置されることが多いという。)おおよざっぱには、ヨーロッパのトップはイタリア(80パーセント)と、ついでドイツ、スペイン、あと北欧諸国。アジアでは、台湾がトップ、あと韓国など。

ケータイが市場化しはじめたころは、日本はイスラム諸国より普及がおくれた。イスラム圏の人々の広い移動性(遊牧性のなごり?)のため、お互い移動しがちな親戚・縁者に連絡をとりあうためケータイが喜ばれた。日本は現在、7000万契約ていどで、もはや普及は頭打ちという見方と、さらに数千万ていどのマーケットがあるという、両方のみかたが産業界にはある。(ケータイ契約数の実数トップは中国だが、ケータイ文化の浸透には、人口比による普及率が問題になる。KDDIの小野寺正社長によると、「中国は1億5000万弱の加入者を抱えて、現在世界1位。続いて1億2000万の米国、3位に7000万強の日本が続く。」)

ケータイの通話、メールの機能でいうと日本人は両方ともよく使うが、アメリカ人は、メールを日本人ほどは使わない。抽象的な文化背景が原因かもしれない(手紙に似た間接性より、本人に話すという直接性への嗜好のため?)、あるいは、文字と画面との関係(英語のアルファベットの(疑似)表音性のため、単語や文が横長になり、画面に収めるのがより難しいため?英文のケー

イ・メールをみた人はご存知ではないか。)が原因かもしれない。経済・技術以外の、文化性といった要因は否定できない。

日本のケータイに関する〈技術の高さ〉の問題は、2つの側面がある。第1は(少なくとも現在)日本のケータイ(本体と通信システム)はおもに国内を志向していること。第2は、「日本人は、「gadget-loving Japanese」と揶揄されるほど、目新しい小物好き。」といわれ、あたらしい技術やこまかなサービスをケータイに求めている、ことである。付加機能がそれほど海外では喜ばれないようである。

たとえば、マレーシアで販売されているケータイ(本体)は「ノキア、シーメンス、モトローラ、アルカテル、サムソン、LG、パナソニック、ソニー&エリクソン」の8社でいどされる。最後の2社が日本のメーカーだが、値段がたかく、バランスのとれたサービスが提供できずシェアは低い。(日本では、電話会社とメーカーの共同で契約条件が、作られ、本体価格が安く、あとの電話使用料のような形で処理される。マレーシアでは、本体価格が正直な形でケータイが販売される。)サムソン、LGは韓国のブランドで、韓国ドラマのブームはマレーシアにも浸透し、そのため両者には高いブランド価値がある。(ドラマに出てきた機種はプレミアさえつくという。)シェアは本体、アクセサリ(こちらのほうが、差はげしい。)ともに、欧州各機種さえおしのかけて、ノキアが他を圧倒している。

日本では、デジタルカメラがケータイに付くのが当たり前になった。画素数が100万をこえるものも多く、インスタントのカメラの代用に近い画質になってきている。(画素はおくとしてピントの問題は残る。)多くの人がデジタルカメラもちあるいていることになり、肖像権、プライバシー、盗み撮りの問題が普通に、潜在的にあることになる。近所の、小さな本屋さんでも「ケータイで盗み撮りをしないで下さい」と張り紙をみかける。一般の人が、特定の人をプライバシーを記録して非常に広い範囲に流すことが、できるようになってしまった。(カメラ機能でなく、録音機能も同様であろう。個人の特定には、文字や音声よ

り、その人の顔写真のほうが強力であろう。制裁的に、広い範囲に個人情報が出されたときは、取り返しがつかない。）

1990年代の後半から急速に広まり、パソコンの後発、カーナビより早い市場化をみた。パソコンと普及率が逆転し、個人所有がむしろあたりまえ、といった状況になってきた。通信方式にしたって第1世代、第2世代とすすみ、現在、第3世代の市場化が問題となっている。（本論執筆の時点では）通話、インターネット（メール）、カメラ程度が基本機能であり、さまざまな付加機能が進展している。コミュニケーションの時間と空間の条件の変異がおこりつつあり、ケータイをめぐって、あたらしい社会・文化的状況が現出している。

さまざまな付加機能は、テレビのCFや、電車の吊り広告、新聞の折り込みで、わたしたちに（最新のケータイをもたなくても、あるいは、ケータイ自体をもたなくても）知らされる状況にある。テレビ（05年1月15日）でヤフー・ジャパンの提供でケータイの人気トップ10を発表していた。1位はドコモSH901ICで、ケータイ画像をテレビに接続してテレビにだせるところが、製品の特徴だと、いつていた。ほか、それぞれに、付加機能に特徴があり、おしゃれなデザインとく道ナビ（カーナビのように、歩くにしたがって街路の地図がでてくる）のあるもの、メールを声で読み上げてくれるもの、財布代わり（カードのように）使え、所有者の指紋センサーのあるもの、マルチメディア的な機能のあるもの、カメラ、ビデオの機能の充実したもの、ケータイの外側ケースが着替えられるもの、ケータイ画面が大きくみやすくなったもの、などとなっていた。付加機能への関心は（上でふれたように、）とくに日本的なもので、（すくなくとも番組では）バッテリー機能の向上、契約条件の透明化といった視点はなかった。

## 5. む す び

ケータイの2つの教育利用のケースと、それを取りまくケータイ文化の周辺を、素描してみた。そのスケッチを振り返ると、未知の機械の青写真をみせられたときのように、随所の不思議や、工夫への賛同を感じた。

紙と活版印刷にもとづく文化現象総体は、<グーテンベルグの銀河系>（この觀念に、すでに、やや西欧的偏向があるのでは？）とよぶにふさわしい。現在の学校制度は、おおざっぱには、その掌にある。ハーバードの中央図書館の両翼中央部に、ワイドナー・セクションがある。そのセクションを、若い図書館の方が一人でお守りしておられた。一冊の本に大事そうにとり、「これがグーテンベルグが、印刷した聖書です。」とおっしゃった。

現在の、広域的な教育制度は、制度の外殻をきしませながら、あたらしい銀河系、あたらしい星雲に突入しているのかもしれない。

### 参考資料

- 1) 名倉健 (2003) 「平成14年度スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi) 研究指定からの実践紹介、和歌山県立星林高等学校」、New Education Expo 2003 in 大阪 (03年6月10日)、発表資料 (および発表)。
- 2) 原清治 (2004) 「私立大学におけるFD活動の現状と課題—仏教大学教授法開発室の取り組みを通して—」、(福井大学) 教育地域学部FD研修会 (04年3月6日) 講演資料 (および講演)。

### 謝辞

ケータイの利用の実際を、仁愛短大情報メディア支援室の青竹美智子氏、砂長谷希代己氏、朝倉好美氏およびKDDI総研の山條朋子先生に教えていただきましたこと、記して、お礼もうしあげます。